



Puzzle文集 4

目次

真っ黒けっけ	1
黄色い線の外側で	2
今日の結論	5
穴戸ギビング・ツリー	7
鋼の男子	9
そろそろおしまい	11
コーヒー通	13
ひよんな女	14
天紙を折る	16
穴戸マインド・ゲームス	18
なんだってんだ	20
木を植えたい男	21
妖怪ぬれせんべい	23
「カツ」と戦う	25
家系	27
余暇を楽しむ	28
アーモンドフィッシュの頃	30
穴戸ハイ・スクール	32
五階から痰壺	33
世界に睨みをきかせて	35
奥付	
奥付	40

真っ黒けっけ

360度真っ黒な世界。さて、どうしたらいいものか。

足の裏には地面の感触。両手をフラフラと漂わせてみるけれど、天井も壁も無いようだ。何も見えない。何も聞こえない。何も臭わない。感覚をなくしたのか。何もないのか。

意識ならばはっきりしとている。嗚呼、不安。確かに俺はここにいる。両手をヒラヒラと顔に寄せてみるけれど、目の前の両手が見えない。もっと寄せてみれば頬を張った。両手を顔にあてて指先を蠢かす。今朝剃った髭の痕。干からびた唇。飛び出した鼻毛。

水をすくうように手を丸くして鼻先に寄せる。臭わない。手で作った器に息を吹きかける。ハアと吹きかければ熱く湿った空気。フウだと冷たいのにハアは温かい。温度を感じる。湿度を感じる。もう一度大きくハアと吐けば、むせかえるほど酷い口臭がした。涙を流して何度も咳をする。臭う。聞こえる。膝に手を付いて腿を叩く。嗚呼、聞こえる。俺の感覚に問題はない。真っ黒けっけの世界で光以外は正常に感知している。

辺りはどうだ。どうなってんだ。息を整えて耳を澄ます。鼻先をクンクンさせる。両手をヒラヒラさせる。何もない。小股になって少しずつ歩き出す。ジリジリ歩く。行けども行けども何もない。不安に潰されそうになる。ならば潰れてしまえと地面にしゃがみ込む。両手にはつると大理石のような冷たい感触。不安を押さえ込むのは身体に悪い。もっと潰れてしまえ。大理石にうつ伏せる。背中にはまだ不安感。振りながら転がりながら次々に体表面をひずませる。身体中の触覚が発動され、いくらか安心感を覚える。

もう一度立ち上がり、ジリジリと歩く。耳を澄ませて、鼻先をクンクンさせて、両手をヒラヒラさせてジリジリと歩く。嫌なイメージが浮かんだ。恒星の光が届かない宇宙の孤島。大理石の球体。俺のほか何もない小惑星。

いつからこんなことになったのか。陽の光も、日常のせわしなさも覚えている。憂鬱が鬱病を呼び、不安が不安病を呼ぶ。何もない小惑星のほうが随分と気が楽だ。何せ何もない。いくらか気が大きく歩幅も大きくなった。このまま空腹に耐えられなくなるまで散歩を続けようか。やがて倒れて意識がなくなるまで歩こうか。消えてしまうのはちょっと怖い。けれども俺は希望の言葉を知っている。

「無からの創生。その確率はゼロにはならない」

宇宙誕生の合い言葉。そいつを唱えながらグルグル歩く。すると何かに躓いた。俺は宇宙の片隅で舌打ちを響かせた。

黄色い線の外側で

予め言っておくが、ことの半分は妄想だよ。

新卒で入社してから、幾度も部署移動を繰り返してきた。その都度一から仕事を教わるものだから、いつでも新人気分が抜けきれない。最近になって中堅と言われていることに随分驚いた。

俺が本当に新人だった頃、五年も経った社員となれば気軽に声をかけられない程のベテランだった。今の俺はどうだろう。どうなんだ。

意識すると変に力が入る。会議では慎重に言葉を選び、以前のように思いつきで発言することは避けるようになった。頭の中ではアイデアが浮かぶのに、結局、声にすることなく会議を終えてしまう。

何を考えようが発信がなければ意味がない。重々承知しているが、思うようにテンポがつかめない。発言のタイミングが分からない。そして、また冴えない一日を過ごしてしまう。

沈んだ気分です駅のホームに立つと、酔っぱらいが寝転んでいた。黄色い線の外側で大声であげている。ホームには駅員がおらず、電車を待つ誰もが知らぬ顔をしていた。

触らぬ神に祟りなし。黙って通り過ぎようとしたところ、タイミング悪く通過電車のアナウンスが流れた。途端に取り巻きの視線が集る。

そいつをどうにかしろ。

無言の訴えに気の弱い俺は素通りできない。溜息をついて、男の肩に手を伸ばした。「危ないっすよ」

二、三度叩いてみると、くたくたになったウィンドウブレイカーは湿っぽい。酒でできあがった恰幅のいい男は、一見すると若そうだが、覗き込むとそうでもない。三〇前後か。デブの年齢は分かりにくい。

湿った指先を擦り合わせて眉間に皺をよせた。男は俺のことなど意に介さず、なおも喚き声を上げている。携帯電話を握りしめて、どうやら話し相手がいるようだ。こんなに表現型の派手なヤツだ。俺の存在に気づいていないはずがない。

「お前のせいで、こんなに惨めな思いをしてんだぞ」

相手は女か。酒と罵声と男と女。他人が割り込むには最悪のシチュエーションだ。

ブワーンと大きな警笛を響かせながら列車が近づいてきた。このまま蹴り落としてやりたい思いを押し殺し、俺は湿っぽい襟首を掴んだ。そして、あらん限りの力で男を黄色い線の内側へと引きずり入れる。列車は轟音とともに通り過ぎていった。

残響に顔を顰めると、男はトドのような格好で俺を見上げていた。

「あんた、いいヤツだな」

そりゃもう、自分でも嫌になるほど。

埴輪みたいに腑抜けた顔して、列車に飛び込んでやろうなどという気概はまったく感じられない。誰も手を出さなかったって何も起こらなかっただろう。無駄なことをして面倒に巻き込まれる。そりゃもう、嫌になるほどいいヤツだよ。

「おい、お前のせいで、迷惑かけちまったじゃねえか」

トド男はなおも携帯電話に怒鳴り散らす。一刻も早くこの場を去りたいところだが、目の前にトド男が立ちはだかる。大げさな身振りで喚くものだから後ずさるほかない。

「お前のせいだろ。全部、お前だよ」

俺が責められているのかと、思わずトド男に目を向けるが、トド男は視線を交わすことなく、携帯電話に怒鳴り続ける。本当は誰にもつながっていないのではないか。

立ちはだかるトド男に往生していると、再びアナウンスが流れた。そして、反対ホームに列車がやってくると、たった今まで傍観者だった男女の団が騒ぎはじめた。

そこで俺は啞然とした。一人の男が駆け寄って来たかと思えば、突然、地面を蹴って飛び上がる。そして、その靴底でトド男の顎を捕らえたのだ。香港映画で見ると見事な飛び蹴りだった。不意打ちを食らったトド男はよろめいて尻餅をついた。

飛び蹴り男は華麗に着地する。続いて、何をやる気か。期待半分に眺めていると、一団とともに列車へ逃げ込んでいった。

「てめえ、なにしやがんだ」

トド男の怒号も、今回に限っては納得である。発車のベルが鳴り響き、列車のドアが閉まろうとしている。一団の笑い声が重なり、男は勝ち誇ったように中指を突き立てた。その姿を見た瞬間、俺の理性をつなぎ止めていた何か弾けた。考えるより先に閉まりかけた列車のドアに踏み込んでいた。

ドアは俺の膝を挟んで止まった。俺はその隙間から腕を突っ込み、戯ける男の襟首を掴まえた。

「なんですか」

「なんだろね」

俺は掴んだ拳をきつく結ぶ。そして、男を引きずり出そうと一気に引っ張った。細身な男ではあったが足一本分の隙間は通れないようだ。激しくドアに打ち付けられて顔を歪めた。女の悲鳴が心地よく鼓膜を振るわす。俺はもう一度男を引いた。どうにか引きずり出そうと試みるが、やはり男はドアに打ち付けられる。無理あるか。そして、もう一度。

「なにやってんのよ」

一人の女が駆け寄ってきた。俺はその勇敢さに敬意を表して勢いよく男を差し出す。男の後頭部が女の鼻を砕き、甲高い声とともに崩れ落ちた。

「嗚呼、君は女の子になんてことをするんだい」

歪に膨れた男の顔に問いかけた。女の子はいつだって綺麗でいたい。鼻血なんて以ての外。俺はドアに挟まれた膝に男を振り下ろし、その顎を砕いた。正義感だよ。

ようやくドアが開き、随分と顔が変形した男を引きずり出した。

「もっと早く開けばよかったね」

男の返事はない。ドアはすぐに閉まり、鼻血を流す女と群がる一団を乗せたまま走り

去った。トド男は濁った瞳をキラキラさせながら立ちあがり、ゆっくりと歩み寄った。

「あんた、サイコーだな」

誉められて悪い気はしない。トド男はホームに転がる男をつま先でつついた。

「生きてんのか？」

男はグゥと声を漏らす。すると、トド男は思いのほかしなやかに足を振り上げ、強烈なシュートを見舞った。男は仰向けにひっくり返り、再びグゥと鳴く。顎の砕けた顔が露わになると、それがどうにも可笑しかったようで、喉をひきつらせながら何度も顔を蹴りつけた。

再び列車のアナウンスが流れた。

「その辺にしておけ」

俺はトド男の湿った肩を掴んだ。

「なんでだよ」

「列車が来る」

「だからなんだよ」

「放り込めばいいじゃないの」

トド男は再び埴輪顔になる。俺は溜息しか出ない。

「どこまでも世話焼かせんなよ」

俺は転がる男の襟首をつかんで持ち上げると、そいつをトド男に突きつけた。トド男は崩壊した顔面から目を背けながらダンスでもするように男を抱きかかえた。もう間近まで列車が近づいてきている。トド男は口元に薄い笑いを浮かべて、俺の顔を窺った。

「いいじゃん」

俺は優しく微笑み返す。

トド男はレールを削る列車へ視線を運び、ヘッドライトに目を細めた。そして、再び俺に向き直ると声を裏返した。

「いかれてんじゃねぇよ」

俺は眉間に力を込め、靴底で二人を押しした。

列車はブワーンと大げさな汽笛をあげながら通過した。

実際のところを言えば、跳び蹴り男は腹を抱えて笑いながら一団とともに列車に揺られていった。その後始末に、どれだけ苦労したことか。

激怒したトド男に、俺はクレーム対応マニュアルをに準じて、まずは耳を傾けることに徹した。すると、出鼻から想定外の事態が起きた。もう一人の酔っぱらいが現れ、トド男に説教しはじめたのだ。

「酔っぱらって当たり散らすんじゃねぇ。本当に怒るんなら酒が抜けてからにしろ」

白髪混じりの髭を伸ばした爺さんは、七人のコビトのどれかに似ていた。酒の苦しみを何度も乗り越えてきたような貫禄を見せつけ、トド男を一瞬に説き伏せた。しかし、どうやらトド男の怒りの対象が俺であると勘違いしていたようだ。時折、俺を指さし、眉間に深い皺を寄せるのだった。

「師匠と呼ばせてください」

いったい何に共感したのか、トド男は爺さんの足元でひざまずき、聞き分けのいい犬

のように、背筋をシャンと伸ばした。そして、酔っぱらい特有の活劇を展開しはじめるのだった。

「馬鹿野郎。みっともねえことするんじゃねえよ」

爺さんは、トド男の頭を叩きつつも、気分よさそうな表情を浮かべている。

俺はようやく解放されたが、どこか惨めな気分になっていた。トド男から謝罪の言葉でも貰わないと納得がいかない。トド男と爺さんの間に分け入って謝罪を求めるか。そんな億劫なことはしたくないだろう。俺は引き際を失い、酔っぱらい劇場を傍観し続けた。

やがて、一人の駅員が駆け寄ってきた。

「どうかしましたかぁ？」

大して走ってもいないだろうが、ふくよかな体型を揺らし、既に息を切らせている。そして、気よさそうな表情で俺に頭を下げた。

「すみません。ご迷惑かけました」

ようやく救われたような気がして鼻の奥がツンとした。

何とか家に帰りつき、熱いシャワーで頭をかきむしった。浅い眠りにつくと、酷く暴力的な夢を見た。思いも寄らない残酷な夢だ。その暴力を受けているのは俺でない。与えているのも俺でない。

翌朝、夢から覚めて呆然とした。しばらく布団から立ち上がることができず、背中に朝日を浴びながら気持ちを落ち着かせた。続いて、畳に転がっている携帯電話に手を伸ばす。そして、アシスタントに半休のメールを打った。

今日の結論

半年切らずに伸びきった髪をかきあげ、週末になればほったらかしの無精髭を撫でる。

「イメージ。イメージ。イメージが大切だ」

想像の力は意志の力の二乗に比例する。

かつての恩人に教わったエミール・クーエの自己暗示。そいつを思いだしながらブルーハーツを口ずさむ。

俺のしていることは大人めいたことなのだろうか。みんな色々なことをよく知っているね。よく実践しているね。俺はつくづく感心してしまう。おまえに、おまえに、おまえだよ。それに対して俺はどうなのか。いつも心配している。そして、口ずさむ。

「イメージ。イメージ。イメージが大切だ。中身がなくてもイメージがあればいいよ」

あれはきっと前向きな自己暗示ではない。俺のような愚か者を皮肉った歌なのだ。でも、いいよ。中身がなくてもイメージがあればいい。愚かな心に平穩が訪れるなら、それでいいよ。

できることなら窓辺に横たわって尻でも搔いて暮していたいのだ。如何にして尻を搔いて暮らすか。年間計画を立てよう。まったく馬鹿げている。だから、俺は思い描く。温かい日差しを浴びながら優雅に尻を搔く俺。高級車はいらない。大型テレビもいらない。たまの焼き肉だって我慢するよ。贅沢なんて一つも望んじやいない。他人様に迷惑をかけようなんて企んじやいない。只只、俺は窓辺に横たわり、西日を浴びながら黄金色に輝く。タイの坊さんみたいに暖色の袈裟でもあればいい。そんなものはないからブランケットくるまる。

顎を撫でれば髭。太陽を浴びながら暮らす俺に髭は似合わない。長い髪も要らない。寒さに震えるヒッピーさんではないのだ。俺は洗面所に立って髭剃りを握った。ハンドソープを口の周りに広げて、三枚刃を撫で回す。しばらく替え刃を買い置きしていないものだから、案の定、顎を傷つけた。プツクリと血の液的が浮かび上がり、俺は千切ったティシュペーパーを張り付けた。

続いて、部屋の真ん中に何枚もの新聞紙を敷き詰める。服を全て脱ぎ捨てて冷たい新聞紙の上に胡座をかいた。ハサミを持ち上げて後頭部にあてると露わになった下腹部が見苦しい。トランクスだけは履いておくことにした。

再びハサミを持ち上げた。布地の裁断バサミだ。普段から裁縫をするわけではないが、実家の母が服を縫っていたから馴染みがある。幼少の頃、勝手に拝借してダンボール紙やナイロン弦などを裁断してはよく叱られたものだ。文房具としてのあたえられるハサミに比べるとはるかによく切れる。一人で暮らすようになって、すぐに自分専用の裁断バサミを購入した。こうして散髪に使用するとは思いつかなかった。

思い切って乱切りにする。髪の手を掴んでは根本からハサミを通す。どうせ全て切り落とすのだ。その課程などどうでもいい。櫛を通す必要もない。鏡も要らない。束を掴んで切り落とす。乱切り、乱切り、乱乱乱♪

粗方切り落として、俺は毛にまみれる。思いの外、白いものが多くて驚かされた。その場に立ち上がり、身体を揺すって毛を落とす。両手で全身を叩きながら激しく頭を振る。乱心、乱心、乱乱乱♪

足の裏に張り付いた毛を左右交互にはたきながら再び洗面所へ向かう。鏡に映った自分と対峙し、目を見開く。アバンギャルドなベリーショートウルフ。切りそこなった長髪が幾本も飛び出し、死に損ないの田舎侍を髭髷させた。乾いた笑い声を響かせ、飛び出した毛を順番に引き抜いていった。口元を歪め、眉を顰め、奥歯を食いしばり、涙を浮かべる。最後の一本を引き抜くと、瞼に溜った滴がこぼれ落ちた。

飛び出した毛を引き抜くと、途端に現代的だわね。ウルフというよりはハイエナだ。最近急激に痩せはじめて頬も痩けた。そんな俺に似つかわしいスタイルだよ。目を見開く。

「現代的だわね♪」

ハンドソープで頭を泡立て、縦横無尽に髭剃りを滑らせていった。ジョリージョリッと音を立て、髭剃りにまわりつく毛を洗面器に振り落とす。ジョリージョリッと音を

立て、髭剃りにまわりつく毛を洗面器に振り落とす。何度も繰り返し、時折、鋭い痛みが走る。頭の上には次々と真っ赤な液滴がプツクリと生じ、ファンキーな大仏のようになる。最後、肩に刃をあてる。ひと思いに剃り落とそうという直前で躊躇った。

俺はひげ剃りを置いた。続いて、パンツを脱ぎ捨て風呂場に入る。熱いシャワーを浴びて全身に張り付いた毛を洗い流した。シャンプーに手を伸ばし、やはり石鹸に持ち替える。両手にたくさんの泡をホイップし、首から上を一緒くたに泡立てた。もう一度、熱いシャワーを浴びて風呂をでる。

新しい下着を身につけて、もう一度、太陽でも浴びようかと思えばすっかり日は暮れていた。つけっぱなしのテレビには磯野家の群像劇。俺の心臓は高鳴りはじめる。嫌な予感をはじめからしていた。無敵の結末を夢見てなんだい。俺は明日に怯えている。

穴戸ギビング・ツリー

居酒屋のカウンターで肩を並べた穴戸は、いつものようにクチャクチャと牛スジを噛みながら一冊の本を取りだした。

「この本を知っているか？」

俺はジョッキを下ろし、居酒屋には不釣り合いな絵本を手にとった。どこかで見たような鮮やかな緑の表紙、そこには英語で表題が記されていた。

THE GIVING TREE

by Shel Silverstein

BILINGUAL EDITION ENGLISH/JAPANESE

「おおきな木だっけ？」

「よく知ってるな」

「割と有名な本じゃないか？ どこで見たんだっけな。学級文庫か」

「なつかしいね。学級うんこ」

穴戸は口の中に人差し指を突っ込んで頬を引っ張る。

「俺も見覚えがあったんだ。児童書コーナーを物色していたら目についてよ。村上訳だっていうからミーハー心も擦られたね。で、手に取ったら最後。年甲斐もなく涙だよ」

涙しながらレジに並ぶのは憚り、そそくさ書店を後にしたが、どうにも気になる。家に帰って Web 検索すれば、各国語に翻訳されたものの他、バイリンガル版も手に入るこ

とを知った。この程度の英語ならば原作のまま読んでみるのも悪くない。そこで、絶版となっているバイリンガル版を中古で注文することにした。

読者レビューを見てみれば、あらまゝ、賛否両論。あの木は健気すぎる。少年は我が儘すぎる。そして、どこか腑に落ちないハッピーエンド。確かに子供に読ませたいかと言えば、疑問符が浮かぶ。

「それでも俺は本屋で泣いたんだよな」

「おまえにはいい話だったんだな」

「おまえはどうだった？」

「ガキの頃だからな。覚えてないよ。泣いた記憶もないけど、悪い印象もないね」

「煮え切らんヤツだな」

「小学生が絵本に持つ印象なんてそんなもんだろ」

カウンターに毛むくじゃらの太い腕が伸び、追加の牛すじ煮込みが差し出された。俺は絵本をめくりながらチビチビとビールを啜る。宍戸はそれを覗き見ながらすじ肉を摘んだ。

「そいつを読み直した時は、さすがに泣けなかったな」

「村上訳のほうが良かったのか？」

「内容が分かってたからだろう。バイリンガルってのもよくないね。英語と日本語の読み比べなんかして変に頭使っちゃう」

続いて、宍戸は仕入れたばかりの蘊蓄を語り出した。

「涙ってのは、本来、目玉の動きをスムーズにさせたり、細菌感染を防いだりするために、涙腺から漏れ出す血液らしいよ。赤血球なんか除かれて透明になるんだと。元々、血なんだってよ」

「へえ。赤血球を除いてくれて良かったよ」

「でなきゃオカルトだ。おまえんこの息子君よく泣くもんな」

「いい加減に名前くらい覚えろ」

「しかし、泣けたからっていい本とは限らないようだ。感情が高ぶると自律神経のうち交感神経が働く。そうするとバランスをとるためにもう一方の副交感神経が優位になる。平常心を取り戻そうとするんだな。この副交感神経が涙のトリガーらしい。つまり、俺はあの本にひどく興奮したんだよ」

宍戸はすじ肉を持ち上げた。脂身が間接照明を浴びてテラテラ輝く。

「何度食ってもここの牛すじ煮込みは旨い。俺はこれを食うためにつまらぬアルバイトに励んでいるんだ。でも、食いながら泣いたことはないね」

マスターは朗らかな笑みを浮かべたまま口元を歪めた。

「すみませんね。発言に遠慮がないヤツで」

「レビューアの反論も分かるが、実際、俺は興奮したんだよね。いいもんに出会ったなあってさ。でも、強制的に読まされたら嫌な気がするかもね。例えば、思春期になった小僧が、親父の本棚からエロ本をあさっているうちに、たまたまこの本に出会っちゃった。なんてシチュエーションがベストだね」

「エロ本探してた小僧が、絵本に興奮するか？」

「例えばだ」

本を閉じると、裏表紙には不機嫌なヒールレスラーかと見紛う肖像写真。本人だろうか。

「この写真、要らないよな」

俺は穴戸と顔を見合わせ、大きく頷く。スキンヘッドにラウンド髭。一見、恵比寿顔のマスターに似ているが、その表情はまるで対照的なヒール。絵本に載せる写真として何故これを選んだのか。理解に苦しむ。

「村上訳にはその写真がなかったはずだ。あったら忘れないだろう。子供向けの絵本と考えれば、あの写真をなくしたのは正解だ。でも、こいつを見てしまった以上、無いのは寂しいね」

俺は曖昧に頷いた。

ところで、さっきからどうしても気になることがある。

「一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「なんでおまえは子供の本など探していたんだ？」

穴戸は一度マスターと目を合わせ、そして俺に向き直る。

「どうやら、親父になるらしい」

どうりで。おおきな木に興奮するわけだ。俺は年甲斐もなく涙を浮かべた。

鋼の男子

あいつは本当に万能だったから誰も手に負えなかった。

テストでいい点取ったって、ドッジボールで最後まで生き残ったって、
「テツローにはかなわないよ」

みんな口を揃えてそう言った。サッカー少年団のエースストライカーをしているジョー君だってみんなと同じことを言うのだ。

その頃、俺はまだ日の浅い転校生だった。他の教室に目を向ける余裕はなく、自分のクラスに馴染むことで精一杯。そうでなくとも視野の狭いガキだった。日々の興味と言えば、灯油漬けにしたカチカチのカー消しゴム、給食のソフトメン、放課後のザリガニ釣り。ちょっと困ってしまうのは、隣の席の意地悪な女の子。テツローって誰だろう。そうは思っても、離れた教室を訪ねてまで、その顔を拝んでやろうという気にはならなかった。

それでも、度々耳にするテツローの名前。否が応でも気にはなる。みんなの憧れ。女子にとってはアイドルなのかもしれない。勝手な想像を膨らませていると、ついにテツ

ローを目にする機会が訪れた。

合同体育の授業だ。年に三回、同学年の全児童が集まって運動競技をするのだ。その日は、みんな大好きで、昼休みにも腕を磨いているドッジボールだった。

そこで俺はテツローの圧倒的な存在感を知る。体育館には上履きの擦れる音がキュッキュと響き、ボールに合わせてみんな行ったり来たりと駆け回る。テツローは陣地の中央最前線に立ち、自分に向けて飛んできたボールならどんな角度からでも受け取った。そして、すぐさま相手に投げ返す。テツローに挑めば最後。誰もが返り討ちにされた。

俺は陣地の隅で姑息に逃げ回る。たまにこぼれ玉を拾いあげ、外野へ投げる。外野から当てた方がメリットあるからね。テツローはそんなことお構いなし。そりゃそうだ。自分さえいれば一対一〇でも負けないのだから。

逃げ回るだけの俺は相手にされない。気付けば最後の一人になっていた。そこで、はじめて視線が向けられた。さらさらした髪。想像していたより色白で華奢な体格。どちらかと言えばハンサムな男だ。そして、俺はまっすぐに飛んでくる速球を受け止めた。

テツローは投球フォームのままポカンと口を開けている。俺は薄い胸板に痺れを感じながらそのボールをガッチリと捕まえていた。

予想外の展開に歓声が響きわたった。俺は随分気分が良くなった。そして、いつもならば外野に投げるところを、テツローに向けてへなちょこボールを放ったのだ。

そのせいもあったろうか。翌年、同じクラスになった俺とテツローは随分親しい間柄になっていた。友達というヤツだ。

俺の放ったへなちょこボールは、勿論、軽々キャッチされ二投目にしてジ・エンド。力の差は歴然。俺たちの付き合いには何となく上下関係があった。

同じクラスになってみて、テツローの名前がクラスを越えて知れ渡っている別の、否、本当の理由を知った。勉強もできます。運動もできます。そして、非道なことだって平気でできるのだ。

そのやり方は、気弱な男子を集団で虐めるような類のものではない。昼休みになれば、カモとなった一人の男子を教室の隅に追いやる。そして、殴る、蹴る。教室にあるものを駆使して、叩く、ぶつける。次々と繰り出される暴力に誰もが啞然とし、泣き叫ぶ男子を見守ることしかできない。

お前もやれよ。そんなことは言はない。ただ真っ直ぐにターゲットを見つめたまま徹底的に痛めつけた。

幸いと言っていいものか、俺がターゲットになることはなかった。それは友達だから。放課後になればテツローの家へ招かれた。友達と言ってもいいだろう。

「いらっしゃあい」

テツローの家へ遊びに行くと派手なおばさんが俺を出迎えた。そして、栗毛を揺らしながら満面の笑みでおやつを差し出すのだ。

「今日はクッキーを焼いてみたのよ。チョコチップでしょ。アールグレイに、メープル」

テツローはテレビゲームのコントローラーを握ったまま、肩間にしわを寄せる。

「ママ、いいからそこに置いといてよ」

おばさんは顔を歪めて舌を見せながら部屋を出ていった。

「食いな。ママのクッキーは旨いよ。俺は食い飽きたけど」

テツローはブラウン管を見入ったままクッキーを勧めた。ひたすらレベルアップに励むゲーム画面を横目に、俺は随分と甘ったるいクッキーを囓んだ。

そして、学校に行けばその日のターゲットを痛めつける。

テツローは俺たちの周りでは珍しくラグビークラブに所属していた。歳を重ねるにつれて腕力もついてくる。学校は黙ってはいられない。保護者会だって黙っちゃいない。

やがて学校に居づらくなったのだろう。テツローは卒業を待たずに引っ越していった。とは言え、自転車で行けるほどの隣町だ。学区が変わって転校したが、俺たちの友達関係はもう少しだけ続いた。

その頃、俺はジョー君と同じサッカー少年団に所属していた。ある日、俺とテツローはサッカーボールでリフティングを競い合っていた。俺は頑張って一四回。テツローはなんとか二〇回。

サッカーを習いはじめた俺は悔しかったのだろう。

「ジョー君は50回できるらしいよ」

俺は負け惜しみのように言った。一息の間をおいて、テツローの不機嫌な声が返ってきた。

「ヒトの自慢してないで、自分の自慢しろよ」

あいつのキャラクターも重なって、その言葉は俺に強い印象を残した。

そろそろおしまい

あと一杯だけ飲んだら寝るとしよう。

湯飲みに湯を七分目、続いてなみなみと焼酎を注ぐ。節電意識から解放されず、暖房は付けずに部屋の中で鼻をすする。両手で湯飲みを包み込めば、熱がジンジン伝わってくる。嗚呼。湯気が鼻をくすぐり、俺は湯飲みを持ち上げゴクリと飲み込む。温かいね。襖の向こうには幼子を寝かしつける女房。額を寄せ合って美しいじゃないの。

俺はもう一口焼酎を含む。続いて、湯飲みを握った両手の親指を突き立てると、おもむろに鼻の穴に突っ込んだ。勿論、両の鼻だよ。焼酎を飲み込むか、吐き出すか。さもないと俺は窒息してしまう。段々と苦しくなってくるのを耐えながら、襖の向こうに思いを馳せる。朝になって母子が目覚めると、両の鼻に親指をつっこんだまま親父が死んでいる。

それはとてもみっともなく、申し訳ないね。俺は親指を引き抜いて鼻で大きく息を吸う。続いて焼酎を飲み込んだ。

夜な夜な勝手に目を覚まして一人ダイニング。暖房も付けずに一人ダイニング。侘びしい気分に浸っていたい夜。今、俺は楽しんでいるんだよ。

なんて、楽しいもんかい。ちっとも楽しかないよ。

茶箆筥のお菓子籠には柿ピーがあったはずだ。そう思いながらも手を付けようか悩んでいる。あまり夜遅く菓子など食うものではない。時計を見上げれば直に四時。夜中と言うより早朝に近いか。かと言って、このまま夜が明けるまで起きているつもりはない。飲み続けていては朝からの運転に支障をきたす。酒を飲んだなら一度は寝た方がいい。逆に言えば、一度眠りさえすれば朝からの運転も問題ではない。

「問題ない ような気がする 俺ルール」

不意に浮かんだ五七五を口にしてみた。

もう一度眠るとなれば、やはり菓子を食わない方が得策だ。寝る前に食い過ぎるなど昔から言われてきた気がする。誰に？ 女房か母親か産業医か。忘れた。どうあれ、眠る前に取り込んだ糖質はクチャクチャと音を立てながら脂肪へと合成されていく。そんな気がするのだ。俺はもう一度口ずさむ。

「問題ない ような気もする 俺ルール」

そうと決まれば、あまり眠る直前にならない方がいい。善は急げ。否、悪だろうが急ぐに越したことはない。結局、俺は小分けにされた柿ピーの小袋に手をかけ、茶碗に開けた。

ぬるくなった焼酎を一口すすり、ピーナッツを一粒摘み上げる。

「なんと！ これで六、五キロカロリー」

いつたかどこかで聞いたことがある。四〇粒でご飯一杯。「なんと！」と前置きされても、無難な数値のように思えてリアクションに困った。それでも、ピーナッツ＝高カロリーとインプットされている。あまり噛み砕かなければ消化、吸収を妨げるだろうか。そんな素人発想で、奥歯で荒く挽いただけのピーナッツを焼酎で流し込んだ。

両手でピーナッツをつまみ上げて、テーブルに両肘をつく。目の前には二粒の豆。こみ上げる衝動。ジャストフィットなんだから♪頭を巡る陽水の独特な声。俺は一口焼酎を含むと歌にあわせて両の鼻にピーナッツを突っ込んだ。

段々と苦しくなってくるのを耐えながら、襖の向こうに思いを馳せる。朝になって母子が目を覚ますと、ピーナッツを鼻につっこんだまま親父が死んでいる。

それはとてもみっともなく、救いがたいね。俺はピーナッツを抜き取ろうと鼻に指を突っ込んだ。すると、案の定ピーナッツは鼻の奥地へ。俺は狼狽。反対の鼻に無理矢理親指と人差し指を突っ込んで、なんとかピーナッツの胚芽を捕まえる。しかし、抜き取れたのは胚芽のみ。嗚呼、死が迫る。

「ピーナッツの胚芽って身体に悪いらしいよ」

いい加減なことを言って、いちいち引っこ抜いていたあいつ。まるごと鼻に突っ込んだ方がはるかに死に近いわ。俺は気が遠くなり、酔いも相俟って、あ、なんかいい感じ。

不意に反射神経が発動。くしゃみとともに焼酎を噴霧。両の鼻からピーナッツ発射。俺は咽せ返り、夜のダイニングで悶える。疲れ切った女房はタダでは起きないが、驚いた幼子が泣き声をあげて寝室から飛び出した。

俺は四つん這いになって、目は充血、涎を垂らした酷い顔で我が子を見上げた。

「だあじょうぶ」

途端に絶句。それでも勇敢な我が子はこんなにも酷いなりした親父のもとへ駆け寄ってくる。俺はその小さな身体を両手で包み込んだ。何より温かい発熱体。冷え切った俺の身体が癒やされていく。

「さあ、寝よ寝よ」

俺は息を整え、幼子を抱えて立ち上がる。そして、ダイニングの明かりを消して寝室へ戻っていった。布団へと潜り込むと、俺の冷たい腕に抱かれた幼子はすぐに眠りについた。

俺は思う。水を飲んでから寝ないと朝が辛いよな。女房より先に起きて掃除をせねばな。次第に熱が全身へ伝播する。嗚呼、温かい。そして、俺は眠りについた。

コーヒー通

ここのパスタ屋、コーヒーが美味いんだよ。あそこのコーヒー屋、コーヒーはいまいちだけどパンが美味いね。俺はコーヒー通。なんてことはない。ないない。それでもちょっとだけ言わせてもらう。

美味いコーヒーは苦くない。美味いコーヒーは香ばしい。パンが美味いあそこのコーヒー屋、ちょっとばかり湯を足してくれれば俺は満足だよ。コーヒーの湯割り。苦いコーヒーは美味くない。いつまでも口にまとわりつくヤツなんて最低だよ。それでもコーヒー飲むならブラック派。お砂糖とミルクは？ いらんです。

実家のお袋さまもやたらとコーヒーを飲んでいた。豆からいれる立派なものではない。それでも少しは奮発して、例の上質を知る人向けインスタントコーヒー。カフェオレ押し銘柄よりは確かに香ばしいね。だから俺も家では例のコーヒー。

出勤前にはコンビニエンスストアに立ち寄る。購入する缶コーヒーの銘柄も決めている。これは唯一香ばしいですよ。会社の後輩からそう聞いた。ボトル缶のキャップをひねれば確かに香る。あれって香料なんですよ。また別の後輩からそう聞いた。ウチの嫁さんが香料会社で働いてるんですよ。随分とハイカラなこと。それにしてもコーヒーにコーヒー香料とは酷いもんだ。なんでもコーヒーの香味は熱とともに飛んでしまうのだとか。ならば仕方がないと、いつもの缶コーヒーを嗜む。嗚呼、このコーヒーは香ばしいね。でも、この香りは香料なんだよね。

外出先では仕事の合間にコーヒー屋。

「マグカップでいいですか？」

いいよいいよ。効果があると思えないけれど、ECOへの貢献は気分がいいじゃない。俺は通りに面した窓辺のカウンターに腰を下ろす。そして、次の用件までの間、PCを開いてのらくらメールのチェックをする。いつでも仕事は山積している。それでも今できることは限られる。終わりの見えない課題の山に重圧を感じながらも、日々の大半はのらりくらり。

多くのメールは目を通してすぐ削除。中には、大した用件ではないのに、手間ばかりかかる依頼。俺はコーヒーを啜る間もなく作業をこなす。

ガラスの向こうでキュルキュルとタイヤを擦る音が響いた。顔をあげれば、交差点で車体を大きく傾けたワンボックス。そのまま転倒して店に突っ込んでくるのでは。そんな不安に駆られ俺は仰け反った。ワンボックスの右折で加速は禁止です。

面倒なPC作業をこなして、ようやくメール添付で送信した。マグカップのコーヒーはすっかり冷めた。湯気と一緒に香味も消えた。スーツの袖をめくれば、そろそろ移動の時間だ。紙コップでもらうべきだったと後悔先に立たず。

鞆にPCをしまつて立ち上がる。そして、腰に手をあてて冷めたコーヒーを呷った。途端、俺は顔をしかめる。嗚呼、苦い。

ドント・トラスト・オーバー・サーティー♪

店に流れる歌のワンフレーズを俺の耳が拾い上げた。ヒッピー・ムーブメントの中で反体制指導者が使いはじめたメッセージだ。響きがいいもんだから誰もが乱用する。軽薄なバックトラックに乗せて、三〇過ぎのオッサンがカタカナ語で歌っていた。

今月、俺は三五になった。

ひよんな女

ひよんなことから女と二人、バーカウンターで肩を並べている。

「最近、猪木に殴られたい男の気持ちがなんとなく分かるわ」

女はグラスを置いて、自分の頬を軽く二、三度張った。

実際、ひよんなことと言うほど予期せぬ展開でここに至ったわけではない。二時間前には出会い目的のパーティーで、お互い溢れていたのだ。知り合っただけでもないこの女の発言の方がよほど想定外だ。

「なんか、あった？」

「なんか」と「あった？」の間には、「嫌なこと」とか、「辛いこと」とか、どちらかと言えばネガティブな言葉が入る。嬉しいことがあったわけでは無かろう。しかし、なるべく限定的な問いかけは避けたい。そう思ったのは、やはりその発言があまりに突飛だっ

だからだ。

「なんとかネーゼとか言うんじゃない」

ほら来た。そこからどうして俺の問いかけに対する答えに至るのか。

「シロガネーゼとか？」

「そんなのもあったわね」

ほかになにかがあるだろうか。

「マヨネーズ？」

女はグラスを持ち上げて氷を鳴らす。俺の声が聞こえなかったわけではあるまい。

「マヨ」

もう一度言い掛けて躊躇う。女は中年男のようにグラスの揺すり、氷は忙しく音を立てた。

「ネーゼって、イタリア語のヒトやモノの属性を示す接尾語だよ」

少しは知性を示せたらうか。しかし、女の反応はない。薄い知識をひけらかす男を内心で嘲笑したろうか。俺は少々不安になる。

「英語でいうとジャパニーズのニーズだね」

「ああ」

あまり賢い女ではないのかもしれない。因みにフランス語だとネーズ。だからマヨネーズね。マヨの語原は諸説あるようだよ。話すべきか、控えるべきか。

人生一度きり、やろうかやるまいか悩んだらやってみることだ。人生を達観したある男の助言を思い出す。

「マヨネーズ」

再び切り出して、やはり飲み込む。同時に女が呟いたからだ。

「やってられネーゼ」

「え」

俺は目を丸めた。鼻の穴をおっ広げ、口を尖らせ、耳を疑った。女は俺の顔を見ることなく話を続けた。

「自分は誰にも認められていない。自分には秀でたものが何もない。そんな気がして何もかもやる気がしない。そういう人種がいるらしいのよ」

ああ、なんとかネーゼね。

俺は一息ついてから、二、三度頷いた。カウンターバーを選んだのは正解だった。テーブルで向かい合っていたら、今頃、毛穴まで全開にした珍妙な顔をさらす羽目になっていた。

「でもね」

女は豊かな髪を揺らしながら俺に向き合った。咄嗟に穴という穴を閉じる。アルコールでリラックスした穏やかな表情は、なんとというか、美しい。見とれていると、女は眉を持ち上げ、少女のような眼差しをくれる。俺は唇をかみしめて首を振った。

「なんでもない」

そう言ったのは女のほうだ。何かを言い掛けてやっぱり止めたというような口振り。俺は視線を合わせたまま首を傾げ、その先を促す。

「なんでもないわ」

猪木に殴られたい男の気持ちがなんとなく分かる。そこに至った女の心理がちっとも見えてこない。俺は酒の力で少し気が大きくなっていたようだ。すっかり氷の溶けたウィスキーグラスを干し、攻勢に出た。

「俺が殴ってやろうか？」

拳を握って下顎を突き出す。するとどうだろう。女はきつく目を瞑って首を伸ばすではないか。それは殴って下さいと言わんばかり。次々に繰り出される想定外に俺は身動きがとれない。咄嗟に浮かんだのは、バブル期に見たトレンドードラマのワンシーンだった。女の頬を張っておいて、いきなり抱きしめるなり「好きだ」。あれね。

女はなおも目を閉じている。俺は下顎を引っ込めて、拳を広げた。再びあの男の助言が浮かぶ。そして、俺は大きく振りかぶった。

待てよ。

そこで俺はあることに気付いた。彼女は俺に闘魂ビンタを求めているのだ。ひっぱたいておいて「好きだ」はないだろう。猪木は何と言う？ ひっぱたいた後に何と言う？俺には格闘趣味がなかった。猪木に関する情報は乏しい。今すぐスマホを取り出してWikipedia したいところだが、そんなことをしてる間に女は目を開けてしまうだろう。

ばっしょん

不意に親父臭い嚏が響いたかと思えば、目の前の女が口元を押さえている。そして、ごめんさいと言いながらハンドバックからハンカチを取り出した。戦慄が走った。嚏が出そうで目を閉じただけだ。俺は危うく嚏待ちの女に闘魂を注入するところだったのだ。

右手を挙げたままの俺に、女は怪訝な表情を浮かべた。俺はそのまま垂直に手を伸ばす。

「はいっ」

「なに？」

「因みに言わせていただくと、フランス語ではネーズだね。だからマヨネーズだね。マヨの語原は諸説あるよ。地名だったり、人名だったり、フランス語の卵黄モヨオが訛ったんだとかね。日本のクイズ番組じゃ複数解答ありの問題で裁判沙汰にもなったたね。それから、マヨネーズと言えば忘れちゃならないのがキューピーだっ」

女のリアクションは極めて薄い。それでも俺は必死になってマヨネーズに関する知識を語り続けた。そして、俺は願った。今すぐ猪木が現れて、首が千切れるくらいの激しいビンタが繰り出されることを、切に願った。

天紙を折る

基本的にアルバイトというものが好きだ。無心になって作業をこなす。それが労働と評価され賃金になる。頭も使わず、重ねた時間によって体得した技術で目の前のものをひたすらこなしていると、単に時間を金に換えているような感覚になる。時間を売って金に換え、残された時間を過ごすための資金とする。悪くない。

和食レストランでアルバイトをしていたことがある。キッチンスタッフだ。和食のキッチンとは、なんとなく違和感がある。厨房というのも何処となく洋風だ。台所？ 厨（くりや）？ とはいえ、所詮、外食チェーンの和食レストランだ。キッチンスタッフでいいだろう。その中で、一番好きだった仕事といえば、寿司を握ることも、天ぷらを揚げることもない。皿洗いも捨てがたいが、何よりも天紙を折ることだ。天紙。天ぷら敷紙。

天ぷらは手付きの籠に盛られて出されていた。その籠には必ず天紙が敷かれ、簡単ながらも必要分を決められた形に折っておく必要があった。鶴だの白鳥だのと凝った形に折るわけではない。弔事用の折り方にならないように気をつけて、右上にずらしながら半分に折るだけである。

繰り返し折り続けていると、すべてがほぼ同じ角度に折れるようになる。天紙職人として生きていけるのではないかと思えたほどだ。勿論そんな職業はない。大学を出たばかりの間抜けな店長だって、そんなことを評価してくれるわけがない。

天紙を折ってられる時間は一日のアルバイトのうち、僅か一〇分程度である。自給九〇〇円で換算すると一五〇円分だ。それでも、六時間のアルバイトのうち、その一〇分が何よりも楽しみだった。無心になって一〇分を浪費する。長い長い六時間のうち、その一〇分だけはタイムマシンに跨ったかのようにあっという間に過ぎてゆく。

無心になって天ぷらを揚げ、無心になって寿司を握れば、あっというまに六時間を浪費できそうなものだが、そうはいかない。空腹のお客様が待っている。高い食材を無駄にはできない。基本的に気が弱いのだ。間違いが許されないという圧力を背負っているのだ。

真っ白な天紙に向かっている時だけ、圧力から解放される。時間を飛び越える。もし、この世に天紙職人なる職業があって、それに従っていたなら、きっと解放されないのだろう。全て同じ角度で折られた天紙を待っているクライアントを思うと、圧力に潰され、弱気になるのだ。

基本的にアルバイトというものが好きだ。無心になって作業をこなす。そんな時間を少しでも見だし、時間を金に換えた時、なんと言おうか、とても安らかな気持ちで身銭を得ることができるのだ。

宍戸マインド・ゲームス

俺たちは毎度のごとく居酒屋のカウンターで肩を並べている。

「いいか、これから思ってもいないことを言うぞ」

そんな前置きをして宍戸は語りはじめた。

「親父になるにあたって、いくつか考えたことがある」

俺は早くも混乱して眉を顰める。

「思ってもいないことなんだな？」

宍戸はうなずく。俺はジョッキを一口傾けてから顎を突き出した。

「生まれてくる子が娘なら、身だしなみには気を付けたい」

そして、宍戸は見慣れぬ器具を取り出した。懐中電灯にしては小さい。シャチハタにしては大きい。俺には縁のないサイズの携帯品だった。

「電動鼻毛カッターだ」

「ええっ？」

俺は目を丸めて阿呆のように口を突き出した。

「家電量販店で安売りしていたのだ。アウトレットと書かれた籠の中で大量に残っていたのだ。わざわざ買い求めに行ったわけではないぞ。たまたま。たまたまだ」

俺の反応が予想外に大きかったからか。宍戸は早口になって狼狽気味に言い訳を垂れた。続いて、溜息をつく。

「鼻毛出てるよ」

俺は反射的に両の鼻を親指で塞いだ。

「違う、違う。あいつがよく俺に言うんだ。こっちが熱を入れて語っている時にそれされると参る。途端に小さくなっちゃう。女は身だしなみに五月蠅いよ」

あいつというのは宍戸の嫁さんになるであろう女のことだ。その発言は身だしなみの指摘以外に別の意図を感じるが、あえて面倒を起こすようなことは言わない。

「電動鼻毛カッターを使ったことがあるか？」

「ない。髭だって手剃り派だ」

「俺だってそうだ。鼻毛なんて今まで鋏で切っていた」

「十分だろう」

「なんというかな。ある種の儀式みたいなものだ。娘が生まれるにあたって俺もワンステップ上を目指す必要がある」

「それが電動鼻毛カッターか。アウトレットの」

「そうだ。お前んところは息子だから分らんだろう。それにしても、初めて電動鼻毛カッターを鼻に突っ込む時はなかなか勇気がいるぞ。安全設計にはなっているだろうが、

モーターで回転している剃刀を鼻に突っ込むわけだ。どこまで突っ込んでいいものか。どれだけ鼻腔に押し当てていいものか。その上、何か焼けたような匂いがする」

「それは不良品なんじゃないのか？」

「そうか？」

「いや、知らんが。そもそも娘って決定なのか？」

「いや、知らんが。息子だったら一篇の詩を贈ろうと思っている」

俺は久しぶりに思い返した。かつて組んでいたバンドが消滅して以来、宍戸は自らを詩人と名乗るようになったのだ。

宍戸はカウンター越しにマスターを一瞥すると、胸のポケットから一枚の紙切れを取り出した。そして、そいつを読み上げる。

ロックンローラーは 基本的に忠実で

ロックンローラーは 少し型破り

ロックンローラーは ルーツを重んじ

ロックンローラーは 時代を先導する

ロックンローラーは 涙を堪えて

ロックンローラーは 声を張り上げる

ロックンローラーの 悲劇性

ロックンローラーの 喜劇性

ロックンローラーは 知っている

ロックンローラーは ふりをする

そんな ロックンローラーになれよ

「気づかれる前に言うが、最後の一節はパクリだ」

マスターは朗らかな恵比須顔で拍手を送る。宍戸は満足気に紙切れを再び小さくたたみ、ポケットに突っ込んだ。

「で、あいつは俺にどんなバンドだったのかと聞くだらう」

「ほう、で、なんと言う？」

「世界最高のロックバンドだった」

俺はうなずく。

宍戸は言う。

「それだけは胸を張って言うておかなければならない」

なんだってんだ

地道にやる。だって、それ以外に道があるかってんだ。

文化芸術というのは、人に強制したり、または、人に導いたり、ということはできないんです。つまり、もともと役に立たないことです。そのかわりに、自由度があるんですよ。

もう幸せです そして好きです もう口と舌で好きです。

ある日のツイート。ツイート？

はじめの一つはご本人様。続く二つはbotというやつ。その一方はご存命。もう一方は亡くなった方の言葉です。ところでbotって何？調べてみればロボットの略とな。自動的に眩かれるプログラムとな。なんだ。俺はてっきり熱狂的なファンが、本やインタビュー記事やらからお気に入りのフレーズを切り出してその都度アップしているものかと思っていた。どうやらそうではない。もっと機械的で味気ないものようだ。

俺は気味が悪くなってツイッターを閉じる。続いて、同じ端末にダウンロードした無料書籍を読みはじめた。「ガリバー旅行記」。その中でも最も有名なリリパット（小人国）編だ。

私のわき腹から飛び降りるひょうしに、四五人の怪我人も出たそうです。

「最も有名」などと言い切ってみたが、正確に言えば、俺が唯一知っていた編がそれだった。児童文学として切り抜かれたそれだ。でも、おそらくガリバー旅行記と聞けば、誰しも小人達に縄で縛られたガリバーを思い浮かべるだろう。初版は一七二六年。日本は享保年間。暴れん坊將軍の時代である。

私のズボン、もうひどく綻びていたもので、下から見上げると、さぞ、びっくりしたことでしょう。

三〇〇年も昔に書かれた物語を携帯端末で読むのだ。電池の消耗が早いからエコモードで目を見開く。マットな画面保護シートは果たして見やすいのか、見にくいのか、眉間にしわが寄る。小さな画面で文字を追いかけるという意味ではツイッターと変わりないが、ゲリラ的に送り込まれる言葉より、自分で選択（ダウンロード）した物語の方が

はるかに安心感がある。それでも、文字を追いかける俺の人相は劇画。しわを寄せた眉間を持ち上げて目を見開く。

とにかく、卵の小さい方の端を割るくらいなら、死んだ方がましだといって、死刑にされたものが、一万一千人からいます。

社会風刺作家。飛鳥ラピュタ、野蛮人ヤフーを生んだ空想作家。原作に描かれた表現が、一体、どれだけ忠実に翻訳されているのか知れない。原民喜の翻訳センスによる賜物か。内容はさておき、切り抜いてファイリングしたくなる魅力的なフレーズに溢れている。

人間山は皇后の御殿が火事的时候、火を消すことを口実にして、不埒千万にも、小水で宮殿の火を消し止めた。

俺は再び Twitter を立ち上げて、ジョナサン・スイフト bot になってみる。最新のプログラムを操るスキルなど持ち合わせていない。だから、俺が切り抜く。俺が書き写す。俺がアップする。俺が bot。作品には一貫して違和感。「人間山」とはいいね。とてもいいなあ。

文化も文明も、時折、ヒジョーに気味が悪い。

今日、bot が俺をフォローした。

木を植えたい男

木を植えたい男なら、誰だってこの男について語らずにはいられない。エルゼアール・ブフィエである。木を植えた男である。

そんなに植えたいなら植林ボランティアにでも参加すればいい。分かっちゃいるけど、仕事にかまけ、育児にかまけ、俺はなんだか余裕がないのだというところに落ち着いている。がんばろう日本だなんて、この国はどこまで国民をストイックにすれば気が済むのか。いつしか、そんな境遇に身を置くことが苦ではなくなってきた。まったく愚かだねえ。俺を見下ろす己をかき消す。

ワイワイみんなで植林活動。なんかそれはちょっと違う。俺は理想の妄想に引き籠もる。ジャン・ジオノになる。社会に背を向けてブフィエを訪ねる。男は筋書き通り温かいスープを俺に振る舞った。そして、パンを二切れ。バターの香りもしない堅いパン。そ

れに引き替えスープはやけに美味しい。

俺はしばらくその家に住み着くことにした。木の実をより分ける手元を眺め、出かけると言い出せば、その背中を追いかけた。

「用がなければついてきなさい」

どこまでもついてくる俺をとがめる気配はまるでない。

荒廃した大地を鉄の棒で突いては、ブナだのカシワだの種を播く。木を植えた男と呼ばれているが、実際のところ、種を播いた男だよな。つまらない感想を抱く。

男もかつては平地に農場を持って、家族と一緒に暮らしていた。ある日、突然、一人息子を失い、まもなく奥さんもあとを追った。

二度の大戦の最中であっても男は黙々と大地を育む。やがて世界が平穏を取り戻すと、かつて荒れ地だった土地はカナンの地と呼ばれ、人々が住み着くようになった。

いまや見ちがえるほどなごやかな心で生活を楽しむようになった古くからの住民に、それら新来の人びとをも加えれば、ゆうに一万人をこえる人たちの幸せが、エルゼアール・ブフィエによってもたされたことになる。

このたぐいまれな不屈の精神を思うとき、それがまったくの孤独の中で鍛えられたのだということをけっして忘れてはならない。そう、生涯の終わりにかけて、ほとんど言葉を失うほどの孤独の中で。

結果オーライ。

しかし、ここは本当にブフィエが思い描いたカナンの地なのか。二度の戦争を乗り越え、憩いを求めてやってくるであろう一万人を予見して、死力を尽くしたのか。

ジャン・ジオノにはこの男が物珍しかったのだろう。孤独の中で木を植えるような暮らしを望む者はいくらもいる。生活の根幹は孤独でありたい。望まなくとも永遠のように続く日々。不安に押し潰されないよう己に役目を課する。

「八時間ほど眠って目を覚ますと、一日があと一六時間もあることに絶望する」かつてフリーターだった知人がそんなことを言っていた。「まるで自由ではない」。そこに安心がないからだ。

役目を持って日々を繰り返すことで得られる安心感もある。それが他人の好奇の目にさらされたのはとても幸運なことだ。生活の根幹に孤独を据えようと、他人様とふれあいたいのは人情。

嗚呼、エルゼアール・ブフィエのようにになりたい。スナフキンに憧れていた二〇代と何も変わっちゃいない。そんな自分が忌々しく、俺は阿呆なふりをする阿呆。何の因果か家の前には花屋があった。園芸店と言っているような割と大きな規模の店だ。俺は一本の苗木を買い、夜な夜な勝手ながらマンションの共有地にそれを植えてみた。

俺だけの秘密。孤独の象徴。やがて誰かの目に留まる。

「あれ、こんなところに木が生えてたっけ？」

誰かの眩きが耳に届いたとき、俺はほくそ笑む。

妖怪ぬれせんべい

何故ぬれ煎餅か。幼い息子と遊んでいた「日本全国鉄道かるた」の中にこんな一枚があったからだ。

ぬれせんべい かって のりこむ ちょうしでんてつ

絵札には銚子電気鉄道デハ700。この真っ赤な車両に縁のない息子は、電車の名称がぬれせんべいだと勘違いしている感がある。

「ぬれ煎餅って、電車じゃねえぞ」

「ぬれせんべいって、でんしゃじゃねえぞっ」

「ぬれ煎餅ってのはな」

「ぬれせんべいってのはなっ」

そこで、まさに魔が差した。

「妖怪だ」

「ようかいだっ」

「そうだ。銚子の妖怪だ」

ぬれ煎餅とはなんなのか。湿った煎餅だという以外に知識がない。食ったこともない。最近では近所のスーパーでも見かけるが、煎餅は堅ければ堅いほうがいいという文字通り硬派な考えから手を出せずにいた。

どうせ大した知識がないのだ。いい加減なことを教えるくらいならば全くの作り話にしてやれ。そう思い至った結果の妖怪ぬれせんべい。その語感には妖怪ぬりかべに近い。しかし、その容姿は妖怪あかなめに近いものと想像する。

ぬれ煎餅に関する知識に乏しい。かといって、妖怪に詳しいわけでもない。俺は本棚から一冊の本を引っ張り出した。一家に一冊、水木しげる著「カラー版妖怪画談」（岩波新書）だ。記憶をたどりパラパラと頁をめくる。そうそうこれこれ。灰色の顔から真っ赤な舌がペロリと伸びた妖怪あかなめ。その紹介文を読んでもみる。

“あかなめ”は、風呂場の垢をなめる妖怪で、誰もいない夜に出る。別に垢をなめるだけで何をする訳ではないが、妖怪が家の中に入ってくるということはあまり気持ちのよいものではない。

そこで“あかなめ”さんに来ていただくかなくても良いようにするためには、風呂桶をきれいにし、垢をためないようにしなくてはならない。

「垢なめがくるぞ」

たとえば、誰もあまりいい気持ちがないから、風呂桶を洗うことになる。

というわけで“あかなめ”は、いわば教訓的な妖怪とみるべきであろう。

続いて、インターネットを叩き、ぬれ煎餅について調べてみる。焼きたての煎餅を冷めないうちに醤油につけ込むと、しっとりとした歯ざわりの煎餅ができあがるようだ。

マドレーヌじゃねえんだ。煎餅がしっとりしててたまるかっ。

どうも、ぬれ煎餅とを聞くと頑ななまでの拒否反応が生じる。ところで、日本語には「かたい」を意味する言葉が多い。堅い、固い、硬い、難い。頑固な人種だね。

そして、妖怪ぬれせんべい。誰もいない夜の台所に出ては、堅焼き煎餅を舐めることでしっとりさせてしまうことは想像に難くない。別に煎餅をなめるだけで何をする訳ではないが、それだけで十分に気分が悪い。昨日買ったはずの煎餅が早くも湿気ていたならば、妖怪ぬれせんべいの仕業かも知れない。

そこで“ぬれせん”さんに来ていただかなくても良いようにするためには、茶箆筒ををきれいにして通気をよくしておかなければならない。

「ぬれせんべいがくるぞ」

といえば、誰もあまりいい気持ちがないから、茶箆筒を掃除することになる。

というわけで“ぬれせんべい”は、いわば教訓的な妖怪とみるべきであろう。

身の丈は茶箆筒に入り込んでしまうくらいに小さなもので、小さな舌でチロチロと煎餅を舐める。しょっぱくて仕方がないからダラダラと大量の唾液を垂らす。俺は息子のベッドタイムストーリーとして寓話を構成する。気持ちが悪すぎてもだめだ。どこか可笑しくにくめない妖怪でありたい。呼びかける際には妖怪ぬれせんべ〜としたい。

息子に語る前に、妻へのピロートークとして実践練習。彼女は話の序盤で眠りについた。ベッドタイムストーリー本来の目的としては申し分ないが、何か腑に落ちない。

俺は翌日も枕元で妖怪ぬれせんべ〜。布団の中で彼女に両腕を絡めながら再び語りはじめた。

「こんなにも堅焼き煎餅がしっとりとしてしまったというのに、まだ茶箆筒の掃除をしない奴がいる。すると、続いて妖怪ぬれせんべ〜は米粒大の何かを次々と吐き出しはじめ、やがて茶箆筒の中をビッシリと埋め尽くす。それは無数の卵。翌朝には次々と孵化しはじめる。何も知らずに茶筒でも取ろうかと茶箆筒を開ければ、中から止めどなく溢れ出す妖怪ぬれせんべ〜」

「ちょっと！ いい加減にしなさいよ！ 気味が悪い！」

彼女は腕をふりほどいて、暗闇の中で起きあがる。その反応にいくらか満足するが、それも束の間、俺はひどく狼狽した。

「なんなのよ。茶箆筒の掃除をしろって言いたいなら、はっきり言えばいいじゃない」

「ちがうちがうちがうちがうあうあうっ」

俺は後ずさりながら大きく腕を振る。すると、寝付いた息子の頭を叩いてしまい、呻き声とともに起きあがる。寝ぼけた息子は暗闇の中を駆け回り、壁に激突。その悲鳴に驚いた俺と彼女は、照明のリモコンを探し求めて畳をバンバン叩く。

やがて俺の手がリモコンを捕まえ、灯りをともし。彼女は布団の隅で小さな息子を抱えたまま座り込んでいた。肩間にしわを寄せて俺を見る。それは眩しいからではないだろう。口元を歪めて笑みを浮かべれば、息子の頭を胸に引き寄せてそっぽを向いた。

「トイレ」

俺は気まずくなって立ち上がる。そして、寝室をあとにした。ダイニングを抜けてトイレへ向かう途中、茶箆筒を見上げた。小さな子鬼が顔を覗かせている。チロチロと舌を出して笑っているようだ。

「カツ」と戦う

カレーを食うチェーン店にて。カウンターで肩を並べた女がカツカレーを食っていた。身銭を惜しんでチキンカレーを頼んだ俺は、肩先に女を感じながら小さくなってそいつを平らげた。

六畳一間のアパートに帰ると、俺は湿った布団に身を横たえた。そして、振り返る。何故あんなにも肩身の狭い思いをしたのか。カツカレーが食えるほどの持ち合わせが俺にはなかった。かと言って、惨めだった訳ではない。貧乏に関してはもはやベテランなのだ。

女はよほど腹が減っていたのだろう。もしくは、よほどカツカレーが好きだったのだろう。女が一人でカツカレーを食う。それは、ある程度の勇気があることではないかと思う。その隣に席をとった男が、普通盛りのチキンカレーなど食っていてよかったのか。

細身の女だった。体型にぴったりと合うスーツを着て、丈の長いパンツからピンヒールが覗ける。外回りの忙しい合間にカレー屋に立ち寄ったというような風体だ。余程ストレスのかかる面会后だったのかも知れない。今日はもうカツカレーだわ。

食券を買う前に座る席を確認すべきだった。小綺麗な（でなくとも）女が一人カツカレーを食っていたなら、俺は大盛りカツカレーを頼んで全力で彼女をブロックすべきだろう。唐揚げカレーというのもいい。味のバランスなどお構いなしに食い意地をだけを満たす。そんなえげつない食事をガツガツ食い荒らし、全ての視線を吸い寄せる。給料日前とは言え、煙草の一箱さえ我慢すればできたことなのだ。

厄介なことに、この世には男気という言葉がある。自分を犠牲にしても困っている他人を助けようという気質。任侠である。ジーニアス和英辞典によれば chivalrous。英国に行けば騎士道と訳されるようだ。途端に品がいいね。

給料日には串カツを食らう。関西で食うような単一素材のそれではなく、あくまで肉とタマネギが層を織りなす関東の串カツだ。まさにハーモニーだね。ハルモニア。ヘレカツの二〇〇〇倍は美味しいが、外で食うにはコストパフォーマンスが悪い。まず、トータルのボリュームが小さい。使う肉の量なんてヘレカツに比べれば遙かに少ないだろうに、一、二倍も値が張るではないか。

はじめて串カツの美味さを知った時、その店の串カツにはなんと串が刺さっていなかった。俺は思わず声に出す。

「串カツ定食、だよな？」

すると、普段無口な店主はニヒルな笑みを見せた。

「中に串が入ってるから気をつけな」

俺は小さく頷いて、衣に箸を下ろす。サクリと切れた。串など入っていない。訳が分からない。それ以来、串カツは決まって家で揚げる。

はじめて串カツを作った時、タマネギをどうやって切れればいいものか大いに悩んだ。ひとまずスマイルカットしたタマネギに串を通す。層になっている鱗茎がバラけないように、自ずと刺す方向は決まる。そして、肉。そして、タマネギ。そして、肉。できあがったそれはおでんかと思紛うほど豪快なものだった。

「芯のほうは除いておくべきであったか」

今では慣れたものだ。月に一度の串カツ以外に揚げ物などしない。油が張られたままの鍋を取り出し火にかける。油がプツプツと音をたてる頃には、串に通された適量の安い肉と甘いタマネギが衣に包まれている。パン粉の上で肉を転がしている時、俺は決まってユーミンの「やさしさに包まれたなら」を口ずさんだ。

古くなった油で、串カツはやや浅黒いキツネ色に揚がる。乱切りのキャベツの上に油を切った串カツを盛り、タツプリのソースをかける。最後にはやはり串を抜いた。俺は白い飯のおかずとして串カツを食べたいのだ。左手には茶碗、右手には箸を握って飯を食いたいのだ。串を抜かれた串カツは理にかなっている。あの時、俺が注文したものは串カツではない。串カツ定食だったのだ。それに気づいた時、ニヒル店主の気遣いに心打たれた。

「中に串が入ってるから気をつけな」

それは要らないよ。訳が分からない。

翌日の遅い朝、俺は洗面所に向かい合って鼻毛の処理をする。基本的に鼻毛以外の毛にはあまり頓着しない。多少の寝癖がついていようが、無精髭が生えていようが「男だ」という理由で許される。

カツカレーを食う小綺麗な女にまた会うかもしれない。最近では念入りに除毛するようになった。電動鼻毛カッターに続いて、鼻毛バサミで仕上げる。俺は気付いている。これは恋だ。

その日はローテーションで言えばほうれん草カレーだった。しかし、状況に応じて唐揚げカレーの大盛りを注文する必要もあるだろう。ベースは同じ値段だったはずだ。しかし、大盛りとなれば一〇〇円余分に用意しておかなければならない。俺は財布の中身を確認した。

準備は整った。そして、俺は勇んでアパートを出る。気づけばまたユーミンを口ずさんでいた。串カツカレーなんてどうだろう。熱々のカレーの上に、串の抜かれた串カツが乗せられている。

「串カツカレーなんてどうだろう？」

傍らに歩く女を想定して問いかける。

来月の給料日までにはなんとかしたい。

家系

ラーメンなら断然「家系」がうまい。醤油と豚骨ってラーメンのトップ二でしょ。ならば豚骨醤油が最強に決まってる。

母ちゃんが遅番の日には、テーブルに七〇〇円が置かれていた。いつも眉を垂らして「ゴメン」と言うけれど、俺には密かな楽しみだった。テーブルの七〇〇円を手にとると決まって駅前商店街のラーメン屋へ向かった。時刻は夕方6時半くらい。結構人気の店だから早めに行かないとお気に入りの席に座れないのだ。

俺は券売機で食券を買って、店の隅、いつものテーブル席に収まった。

「いらっしゃい」

店主はいつも笑顔がいい。必要以上に話しかけてこないからすごくいい。

「いつもの」

俺は呟いて食券を差し出す。味玉ラーメン七〇〇円也。

「まいど」

差し出された氷水を受け取って一気に飲み干す。ラーメンを待ちながらグラス表面の水滴を指で拭いていると、カウンター席のオッサンと目が合った。ほうれん草ラーメン油少な目にサービスの半ライス。禿げ上がった頭皮が油っぽく輝く。ちょっと情けない顔で俺をチラ見して、また丼に顔を向ける。

冴えないオッサンだな。

毎度ながらそう思う。いつも見かけるオッサンだった。よっぽどラーメンが好きなんだろうが、なんだかそれって子供っぽいじゃないか。大人なんだからちゃんと栄養とれよ。でも、一応気遣ってのほうれん草トッピングか。

オッサンは財布から一〇〇円玉を取り出し、それをカウンターに置いた。半ライス食っておいて替え玉かよ。続いて、丼に残ったほうれん草を汁に浸してご飯に盛る。そして、そいつを一気にかき込んだ。

「おまち」

やがて俺のテーブルに味玉ラーメンが運ばれてきた。普通にラーメンを頼んでもゆで卵が半分のとっている。味玉トッピングで卵は一個半。心なしかほうれん草がいつもより多い。俺は店主を見上げた。

「あちらのお客様から」

店主の示す先には油っぽいオッサン。

「青いもんも食っとけ」

オッサンはカウンターを立つと、捨て台詞とともに暖簾を割って出ていった。

「まいど」

最近では関西でも家系ラーメン屋を見かける。出張先のホテル近くに見つけると、つい暖簾をくぐってしまう。その都度、あの時のことを思い出す。よっぽどラーメンが好きなんだろうが、なんだかそれって子供っぽいじゃないか。大人なんだからちゃんと栄養とれよ。

ラーメン屋で一人丼をつつくオッサンは冴えない男の代表格のように思っていた。今でも若干そんな思いがある。夕飯時、俺はカウンターの隅で小さくなる。そして、わき目もふらず丼を空にした。

実際のところ、それほどラーメンが好きではないのかもしれない。一人きりの出張で俺は酒を飲まない。さっさと食事を済ませて部屋のベッドに転がりたいのだ。牛丼ならば昼に食った。となれば、カレーとラーメン以外に選択肢はないだろう。

時折、あの頃の俺と同じくらい小僧と出会う。なんだか気まずい思いがして、ラーメン屋しかなかったんだよと、内心で言い訳を垂れる。

「青いもんも食っとけ」

なんて言いながら店員に一〇〇円玉を渡す。そんな気取った真似は普通できないだろう。あのオッサンは何だったのか。俺と同じくらいの息子がいたのかもしれない。出張続きで寝顔以外に我が子の顔を拝むこともない。俺に息子の面影を見つけオッサンは言う。青いもんも食っとけ。なんてね。しかし、あの記憶も少々怪しい。

「あちらのお客様から」

そう言って油っぽいオッサンを指した店主の顔が、どうも馴染みのバーテンと重なるのだ。俺は首を傾げてラーメンを啜る。小僧は氷水を一気に飲みすると俺を一瞥した。何処か寂しげな瞳に見えたのは身勝手な思い込みか。

冴えないオッサンだな。

小僧の声が聞こえてきそうさ。

余暇を楽しむ

買い物から戻ってきた女が俺の姿を見て驚いた。

「三時間前と何も変わってないじゃない」

喫茶店でコーヒーを嗜む。煙草は吸わないから禁煙席。手にした文庫本はほとんど読み進めてはいない。何もせずに座っているのも阿呆みみたいだから文庫本でカモフラージュ。サムという名の猫がプリントされたお気に入りのブックカバーをたまに眺める程度。確

かに、彼女の言うように何も変わっていない。

「暇じゃないの？」

「余暇を楽しんでいたんだよ」

「余暇って、余りに暇ってこと??」

「そうじゃないだろ。束の間の休日だ。サラリーマンは割と大変なの」

「敷居をまたげば、男には七人の敵がいるっていうからね」

時折、女は随分と古めかしい言葉を使った。

「楽しんでるんなら、もうちょっと行ってきていいかしら？」

「どうぞ。なんか探してんの？」

「小銭貯金しようかと思ってね。あの女々しい豚の貯金箱が欲しいのよ」

女々しい豚。その響きにギョッとする。しかし、俺は正確にその貯金箱を思い描いていた。

「あの睫毛がクリンとした豚のレトロな貯金箱？」

「そうそうそれぞれ。何処にでもありそうなのに、いざ探すとないのよね」

そう言い残して女は消えた。課題を残していくものだから、俺は飽きることがない。あの睫毛がクリンとした豚のレトロな貯金箱。そいつを端的に言えば確かに女々しい豚の貯金箱だ。言語の目的が情報伝達だというならば、女の言葉は無駄なく機能している。しかし、言語とは伝達手段のためだけに存在するものではないようだ。

このメスブタが！

そう言いながら貯金箱に金槌を振り下ろす女を想像する。小銭が溢れ出し、女は嫌らしい笑みを浮かべる。

俺は大声を上げたくなる衝動を押し殺し、頭をかきむしる。マグカップには冷め切ったコーヒー。一口含んで、ゴクリと喉を鳴らした。

豚の貯金箱ことピギーバンク。PYGGなる粘土で貯金箱を作るように頼まれた陶器職人が聞き違えてPIGの貯金箱を作ってしまったことがはじまりとか。蚊取り豚と重なって日本発と思いきやヨーロッパが発祥のようだ。形状としての安定感、やがて屠られてしまう切なさ、取り出し口のない陶器の貯金箱と家畜豚は通ずるものがあるように思える。

途端に女々しい豚が愛おしくなる。俺はゴメンねと目を赤くしながら金槌を振り下ろす女を想像する。そうだ。そうだろ。そうあって欲しいものだ。

やがて女が帰ってきた。

「四時間前と何も変わってないじゃない」

「貯金箱はあったの？」

女は口を尖らせて首を振った。俺はひどく落胆した。そして、4時間ぶりに尻を持ち上げる。

「隣駅に大きな雑貨屋があったろう」

「わざわざ行くの？」

女は目を丸め、俺は大きくうなずいた。あの女々しい豚を連れて帰らなければ、俺の余暇は完結しない。ように思えたのだ。

「わざわざ行くよ。俺が貯金箱を買ってやろう」

「ならば行くわ」

西日の射す駅のホームに立てば、アナウンスのベルが何処かで聴いた歌謡曲になっていた。

「あ、ナントカちゃんの歌」

そう呟いて、すぐに口をつぐむ。おそろおそろ女を横目に見れば、案の定、醒めた目で口元に薄い笑みを浮かべている。

「オ・ヤ・ジ」

そう言われて、少々喜んでしまう俺がいる。

敷居をまたげば、男には七人の敵がいる。

束の間の休日、もう少し楽しんでいたい。

アーモンドフィッシュの頃

「アーモンドフィッシュって知ってる？」

「この前、給食で出たよね」

「違う違う。そういう名前の魚のことさ」

俺はまた知ったかぶりをする。知ったかぶり？ ありもしないことを言うのだから、ただのデタラメか。でも、本当にデタラメなのかどうか確信が持てない。もしかしたらいるかもしれないよ。アーモンドみたいな縞々柄の茶色い魚。焼いたらアーモンドみたいに香ばしい魚。どんな魚だろう。君と一緒に考えてみたい。そう思ったんだ。最後にはちゃんと白状するよ。ごめん。本当はそんな魚なんていないんだよ。

だから、君は驚いた顔して問いかけてくれればよかったんだ。

「どんな魚？」

そうしたら、俺は聞き返すよ。

「どんなと思う？」

それなのに君ときたら。

「タツノハトコって知ってる？」

「再従兄弟？」

「そう。タツノオトシゴの仲間だって。タツノオトシゴの従兄弟くらいかしら？」

俺はなんだかガッカリしたよ。

「違うだろ。龍の子供と再従兄弟なんだから、タツノハトコはタツノオトシゴの親の再従兄弟じゃないか」

少しムキになって答えたね。

「そっか、頭いいね」

タツノハトコだなんて、よくもそんな出鱈目を言うもんだ。大体、タツノオトシゴなら小さい魚で赦されるけれど、タツノハトコだったらタツと同じくらい大きくなければおかしいだろう。タツって龍だよ。そんなことあり得ないだろう。タツノオトシゴノハトコならばまだ分かる。

君のデタラメは俺のデタラメと違って悪意を感じるね。俺はアーモンドフィッシュについて一緒に考えてみたかったんだ。そんな素敵な時間を君と共にしたかったんだよ。それをなんだい。俺のデタラメをただのデタラメとしてか受け取れなかった君は、デタラメで仕返しをするわけだ。しかもなんだい。タツノハトコだなんて随分とお粗末なデタラメじゃないか。

「嘘じゃないもん」

目の前には涙を浮かべた君がいる。れ？

「嘘だろ」

「嘘じゃないもん」

一筋の涙が溢れた。

「いや、そうじゃなくて」

俺の「嘘だろ」は、君への非難が声になっていたことへの驚きであって、決して君の言うことが嘘だなんて思っていたわけではないこともないけれど。れ？

俺は両腕をつきだして手のひらを広げる。涙の重圧を押し返しながらか顔をしかめた。

「ちょっと、あんた何してんのよ」

嗚呼、正義感。ここぞとばかりにリーダー格の女子が分け入ってきた。バレー部だか、バスケット部だか、やたらと立端のある女だ。俺はひそかにフランケンと呼んでいる。

「事故事故事故事故事故だよ」

俺は突き出した両手を小刻みに振るった。

「まず、謝んなさいよ」

謝れなかったって、俺だって被害者なんだぜ。

「タツノハトコだなんて」

俺は眩く。すると、教室の外から俺を呼ぶ声が響いた。

「おい、早く来いよ。さっさと便所掃除やっつけちまおうぜ」

俺は反射的に振り向き、そのままの勢いで駆けだした。

「ちょっと待ちなさいよ」

背中を追いかけてくる正義感を振り払い、廊下へ飛び出した。二つの坊主頭が廊下を併走する。

「おまえ、しょっちゅうあいつと喋ってんな」

「フランケン？」

「違うよ。ちっちゃいほう。おまえ、あいつのこと好きなんだろう」

君の泣き顔がフラッシュバックし、俺は腰から砕けそうになる。急に減速した俺に坊主頭が振り返る。その顔にはニヤリと嫌な笑みが張り付いていた。

俺はまわりの男子よりほんの少し気付くのが遅かったようだ。

女子と話をするのは、とても格好悪いことなんだ。

それ以来、君と話すことはなくなった。

君に限ったことじゃない。フランケンのお節介にだって舌打ちしか返さない。ハードボイルド気取って春機発動。俺は居心地の悪い少年期に突入していた。

宍戸ハイ・スクール

「こいつは俺がおまえと出会うもっと前のことだ」

宍戸はハイスクール時代を振り返った。あまり聞くことのない話だ。

「俺は決して華やかな学生生活を送ってはいなかった。ナインティズだよ。世紀末にはノストラダムスが降ってくると誰もが信じていた頃だ」

誰もが信じていたわけではなかろう。ノストラダムスが振ってくるわけでもない。いちいち訂正するのも面倒で、俺は曖昧にうなずいてからジョッキを空にした。

どこだってそうかもしれないが、宍戸の高校は原則アルバイト禁止とされていた。親から支給される微々たる小遣い以外に収入はない。禁止と言われれば無理に金を稼ごうとはしない。自ら面倒を起こすのは何より面倒な質だ。金無し女無しのティーンエイジ。宍戸にとって贅沢といえばライスバーガーを食すことだった。

「しかし、あれの難点はドリンクのチョイスだ。コーヒーでもオレンジジュースでもないだろう。バーガーだなんて気取っても握り飯みたいなもんだからな。となれば緑茶か味噌汁だ。でも、バーガー屋にそんな気の利いたもんがあるわきゃない」

予想通り大した話ではないようだ。ハイスクール時代の話聞くことがないのは、取り立てて話すこともないからだろう。俺はカウンター越しに追加のジョッキを受け取る。宍戸はいつものように握り飯をかじりながら牛すじ煮込みをつついた。

「おまえがパンを食っているイメージないな」

「小学校の頃に散々食わされたからな。酷いもんだ。学校給食で米が食べたのなんて週に二度だけだったからな。余剰農産物処理法だよ。知ってるか？ 余剰な農産物を処理する法律だぞ。そんなもんがあっていいのか。身勝手な毛唐どものお陰で俺を取り巻く食事環境が随分と狂ったよ。週に三日のパンも酷いが、米の日にも配られる牛乳ってはどうなんだ。感覚を疑うぞ。茶あ持ってこい。茶あ。米食いながら牛の乳なんか啜ってられるかっ」

言っておくが宍戸は酒を飲まない。眉間にしわを寄せて握り飯にかじりつく宍戸を見かねてか、恵比寿顔のマスターが湯呑みを差し出した。

「あ、すみません」

宍戸は遠慮なく茶を啜った。続いて、牛すじをつまみ上げながら少年のように目を輝かす。

「考えようによっては、あのパン食地獄を乗り越えたからこそ、米のありがたみ分かるのかもしれない」

俺は歯形のついた塩むすびを見下ろす。

「しかし、欧米食に反抗的なおまえがライスバーガーとはなんだか中途半端じゃないか？」

「俺だって人並みにハイカラな時間を過ごしたいさ。ハイスクールだぞ」

「ハイカラねえ。で、ライスバーガーか。で、結局何飲んだわけ？」

「コーヒーだ。ライスバーガーにブラックのコーヒー。そいつが何より粋でハイカラだと己に言い聞かせた」

「粋ねえ」

毎週のように代わり映えしない男連中と店の隅を占拠しては、コーヒーを啜りながらライスバーガーにかじる。容易に想像がつくのは、今の俺たちと大して違いがないからだろう。

「ドシドシっていつもライスバーガーにコーヒーだよな。なあんて言われてる間に、いつしか俺のトレードマークになる」

「ドシドシってなんだ？」

「ハイスクール時代のあだ名だ。そこは食いつかんでいい。継続は力。そいつだけは確かだね。ライスバーガーにコーヒー。そいつは己を確立するための長くとも確かな道だった」

「ドシドシねえ」

「そこは食いつかんでいい。さて、そろそろ帰るか」

「今日は早いな。いつもなら牛すじ三杯は食うじゃないか」

宍戸は一瞬の間の後、気味の悪い薄ら笑みを俺に向けた。

「俺な、また小遣い制になるんだ」

つまり、それを俺に伝えたかったわけだ。

俺はマスターと視線を交わす。変わらぬ恵比寿顔が返ってきた。

五階から痰壺

二週間ほど咳が止まらない。黄緑色したヌメヌメがいつまでも喉の奥から分泌され続けている。

先輩営業マンの運転する助手席で、俺は止まらない咳に堪えながら口元を押さえて頬を膨らます。さっきから何度もヌメヌメを飲み込んでいる。

「変な咳してんな」

「風邪っぽい感じでもないんすけどね」

とは言え、放っておいては仕事に支障をきたす。一度は病院に診せに行った。初老の医師は胸に聴診器をあて、喉の奥を覗くと、一週間様子を見ろと言う。そして、咳止めや痰出しの薬を処方するだけだった。確かに薬は一時的な効果がある。しかし、薬を忘れて仕事に出ると、その日の午後は散々だった。

「ガンなんじゃねえの。気をつけな」

先輩営業マンはハンドルを切りながらつまらぬ冗談を言った。

「ガンってどう気をつけたらいいんすかね」

「どうしようもねえか」

本当にガンだったらどうすんだと内心少々憤る。下手なハンドル裁きのせい、ヌメヌメを飲み過ぎているせい、気分が悪かった。

近年では、歩き煙草の許されないエリアが増え、携帯用灰皿を持ち歩く人が減った。ポッケロなんてブランドもあったが、その売り上げは伸び悩んでいるのではなかろうか。そこで、携帯用痰壺ベッケロを提案したい。

ポッケロが出回り始めた頃、手元でトントン灰を落とす姿は紳士的でどことなく粋だった。ベッケロはどうだ。クワァァッと喉を鳴らしては、さっとベッケロを取り出し、パイと吐き出す。クワァァッの時点で紳士的とは言い難いが、どことなく粋ではなかろうか。

茹で蛸のように顔を赤らめながら口の中でゴホゴホと咳をし続ける俺を見かねてか、車が駅前につけられた。

「おまえ、もう帰んな」

「大丈夫っす」

言ったそばから咳が出る。

「そんなんで客先同行されても迷惑だよ」

優しさ半分。本音半分。俺は置き土産に何度も咳込みながら、頭を垂れて車を降りた。

陽の当たっているうちに家についた。何年ぶりだろうか。せっかくの時間を有効活用したいところだが、病人扱いの早退だから家でジッとしている他ない。俺は家着に替えて敷きっぱなしの布団に横になる。そして、授乳枕を首の下に敷いた。

肩こりが酷かった頃、子持ちの同僚から薦められたのが授乳枕だった。Cの字をしたあれだ。授乳の際、腹に巻き付けて乳児を支えるあれだ。折角のお勧めだが、独り身の俺にはなかなか手を出しにくい一品だった。ひとまず旅館でよく見かけるツボ押しを購入。続いて、マッサージ機能付きのクッションを購入。いずれも一時的な快楽は得られるものの回復傾向は見られなかった。

やはり、枕か。

俺は意を決して授乳枕の購入を検討し始めた。テラーメイドの枕というものもある

ようだが、コリがとれるという保障もない枕にウン万円もかけてはいられない。しかし、嫁も子供もない俺が「ベビちゃん本舗」に踏み入れる勇気もない。となれば通販。便利な世の中だね。帰宅途中で携帯端末で授乳枕まで買ってしまう。

Cの字の窪みに後頭部を落とすようにして、一番太い部分を首に添える。嗚呼、ジャストフィット。これが見事に効果発揮。一週間もすればコリはすっかり消え去った。

しかし、なかなか体調は万全とはいかず、引き替えにしつこい咳とヌメヌメが俺を襲った。身体を横たえていると余計に咳がでる。家の中となれば遠慮もなくバッション、バッション、クワアアアッて喉の奥からこみ上げるヌメヌメ。

ガンなんじゃねえの。気をつけな。

先輩営業マンの悪い冗談が思い起こされ、妙に不安になる。俺はこのまま布団の上で冷たくなって誰にも気付かれずに白骨化するのだろうか。

身震いがして起きあがる。そして、洗面所に駆け、黄緑色のヌメヌメを吐き出した。

「嗚呼、喉痛え」

水を一口含み、また布団に横になる。すぐにまたバッション、バッション、クワアアアッてヌメヌメ。俺は再び立ち上がり、気分を変えてベランダに立つ。割と交通量の多い通りに面したマンションの五階だ。歩道には行き交う人々。そして、眼下にはちょうどマンホールがある。俺はそいつを見下ろし、おもむろに口を尖らせた。頭上にそんな危険な輩がいるとは露知らず、マンホールを跨ぐ女。その背後をすり抜けてヌメヌメがマンホールに弾けた。

「おおっ」

思わず感嘆の声が漏れる。マンホールの中央に痰壺を置いたらどうだ。吹き矢の如くヌメヌメを発射させて見事に壺を射抜けたならばどうだ。今では自己満足にすぎないが、やがてオリンピック公式競技にでもなってみろ。俺は一躍脚光を浴びることになる。五階から痰壺、日本代表だ。

俺はその日を妄想しながら、バッション、バッション、クワアアアッ。

世界に睨みをきかせて

世界に睨みをきかせている。

それでどうにかなるのか俺は知らない。嘘。どうにもならないことくらい分かっている。それでも東京。それでも渋谷。JRから東急へと乗り換える駅構内、途方もない圧力に耐えるべく俺は眉間に力を込める。週末を除く毎日だ。行きはよいよい帰りは怖い♪なんて、行きだってよかないよ。帰りは尚よくない。誰もが顔面を硬直させて高圧力

に耐えている。そこまでして、ここを通過しなくてはならない意味はあるのか。近所でも評判の親子。虫も殺さぬお父さんだって、一線を越えた息子には問答無用で平手打ちを振り抜く。驚いて目を見開く息子には痛恨の往復ビンタ。そこに答えを求める余地はあるか？ 問答無用はそこいら中にある。それが生活なんだよ。これが原理なんだよ。

「痛恨の一撃ってはじめて聴いた時、2CONの一撃だと思ったよね」

「ドラクエ？」

「ドラクエ」

でも、それって、睨みをきかせているとは違うね。眉を顰めている。耐えている。堪えている。どちらかと言えば負けているね。それでも東京。それでも渋谷。スプリットタンなんてものは俺には未だお伽噺だけれど、それでも耳にピアス。ジャラジャラぶら下げて耳たぶ弛んでる男とかいるじゃない。スキンヘッドの女とかいるじゃない。どこの部族が来日したのかと思えば、流暢な日本語を喋っている。杖をついて歩く巨漢。電動車椅子で二人乗り。ケミカルウォッシュのデニムベストで首には赤いバンダナ。残りの毛だけをやたらと伸ばしている禿。おまえとおまえはただの病気だ。ごめん。壁には得体の知らない染み、染み、染み。それにしても、空気。得体の知れぬ粉塵が飛び交い、俺の鼻毛はますます伸びる。このまま切らずに放っておこうか。鼻毛で三つ編みできるようなになれば、高圧力の空間でも素足で歩けるようになるのだろう。

「スプリットタンというものを聞いて以来、タン塩を喰うのやめた」

「最近、焼肉屋すら行かないじゃない」

「行ったら食いたくなるだろう」

「食べたいの？」

自主的にやめたんだよ。牛のペロを食うという行為も、なんだか気味の悪いお伽噺に思えてきた。ペロだぜ。痛いよ。

世界を正常に戻したいと思わないか。

それでも本当は世界に睨みをかせているんだ。それでどうにもならないことくらい分かっている。それでも東京。それでも渋谷。ロック'ン'ロールで耳栓。爆音で脳味噌を奮わせていないと立っていることすらできない。最近、ピアノが耳につくロック'ン'ロールが多い。あんなの最低な音塊だ。やたらと多いよ。ピアノの音色が印象的なやつ。嗚呼、嫌だ、嫌だ。なのに、無性に聞きたくなる帰り道。敗走。素敵な音色が俺の鼓膜を打つその時、きっと世界が歪んでいる。

世界を正常に戻したいと思わないか。

答えはノーだ。

誰もが世界に睨みをきかせている。狭い狭い世界に圧力を込める。そうして世界を支えている。ただひたすらに週末を目指して、賢明に睨みをきかせている。

「そういうことだ」

女は首を傾げる。

「それが生活なんだ」

傾いた首は戻らない。

「では、はっきり言おう。ヒカリエだかボンバイエだか知らんが、休日にまで渋谷に出向くのは御免なんだ」

「あっそ。別に誘ってないじゃない」

あっそ。

「ボンバイエってはじめBOMBER YEAH！ だと思ったよね」

「猪木？」

「猪木」

奥付

奥付

Puzzle 文集 4

<https://puboo.jp/book/42935>

著者 : puzzle

著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/42935>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/42935>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ

Puzzle文集4

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
